萌と留び

あなたは、
どう思いますか？

『まち』というものは、ある日、突然にできるものではない。それは、ここに住む私たち市民が、自分たちの理想のまちをつくるため、そこに根を張り、日々汗水をたらしながら、自らの手で築き上げてきたもののはず。しかし、現在はどうだろう…

「どうせ、誰かがやるんだろう」。その誰かって、市役所のこと？あなた以外の他の誰か？それは、あなたには関係のないこと？

関わるのは市民の義務？関わらないのは、悪いこと？それとも……。

『市役所で除雪しないから俺がやってんだ！』。そのひと言が、このドラマの始まりだった。

■

ぼくは、市役所の広報担当の、留萌ひとしです。

昨年の冬、大雪が降り、除雪の様子を撮影に行ったときのこと。住宅地のY字型の交差点にある「カーブミラー」の周りにたまった雪を除雪しているおじさんを見つけた。

留萌「市役所の広報ですけど、除雪してるところを撮影してもいいですか？」

おじさん「あんた市役所でしょ。あんたに言ってもしょうがないけど、このミラーが雪に埋もれていて危ないと思っていたんだけど、市役所で除雪しないから俺がやってんだ」

留萌「ぼくから土木課に伝えておきます」

――写真を数枚撮り、市役所に帰ってきたぼくは、さっそく土木課へ行き、おじさんとのやりとりを話した。

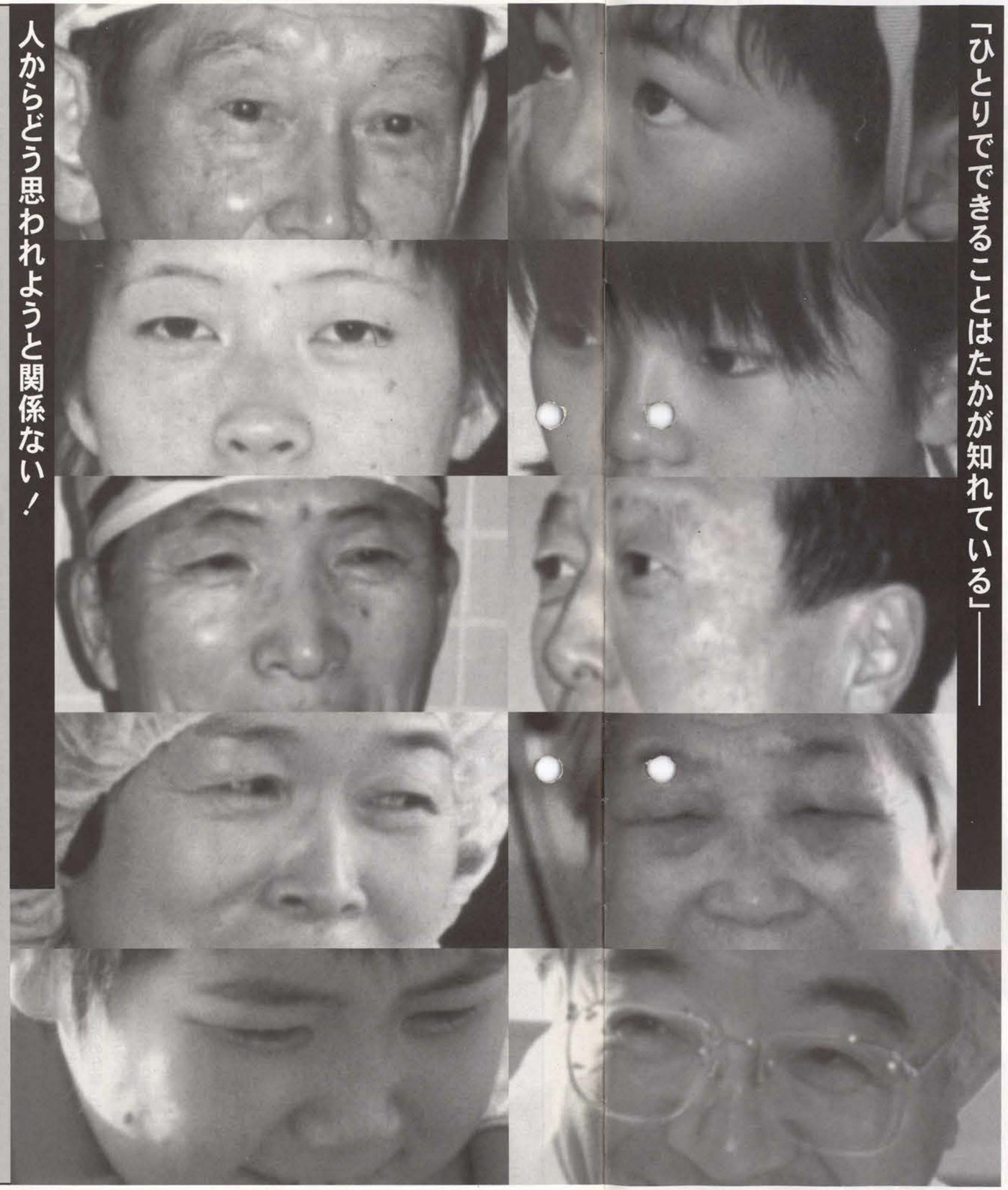
土木課「自分たちの周りにある雪を、自分たちで処理するのはあたりまえだろ」

留萌「市が作業することはできないんですか？」

土木課「いや、やろうと思えばできるんだ。どんどんお金を出して機材を使って、人を雇えば、そりゃ、いつでも雪のない住みよいまちになるさ。でも、ウチらには予算ってものがあって、今の除雪体制が限界さ。だから、市民が理解して、協力してくれないと、どうしようもないのさ」

――「その雪は誰がかたづけるものなのだろう？」

そんなモヤモヤを胸に残して、ぼくは自分の係へ戻った。



「ひとりでできることはたかが知れている」――

人からどう思われようと関係ない！

あなたは、どう思いますか？